

ロールシャッハ・テスト反應におよぼす

検査者の影響に関する研究 (1)

—検査者の好感度と基礎的評定結果との関係—

上 田 順 一

I 問 題

ある一つの検査に対する被験者の反応(検査成績)は、その際に用いられる検査材料によって重大な規定をうけるほか、そのときの検査状況、検査の実施にあたった検査者によっても影響されると考えられる。ところが一般には、ある検査に対する反応は、一定の検査材料に対する反応と解されている。いわば単一なS—R(刺激—反応)の結合関係とみなされているように思われる。より広範なS—R理論で投射検査行動(projective test behavior)を説明しようとするところみは Goss ら⁽⁷⁾⁽⁸⁾によってなされた。かれらによれば、検査事態における諸刺激は外部的なもの(external stimuli)と内部的潜在的なもの(potential stimuli)からなるとされ、前者をさらに分類して、検査材料と接触刺激としての検査室の状況および検査者の容姿、行為としたが、このところみは、検査事態における刺激をきわめて広範に、しかも分析的にとらえようとしたものとして注目に価するといえよう。

いま、検査事態における刺激としての検査室と検査者の二つの問題を、具体的なテスト臨床の問題として考えてみると、検査室が比較的類似の条件設定下におかれるのに対して、検査者のもつ多様性は、その等価の設定をきわめて困難にしていることに気がかざるを得ない。かりに検査者が一定の実施方式を忠実に確実に実行したとしても、検査者自体のもつ固有のいくつかの特性、例えば、検査者の印象、感じ、言語特徴、行動特性、地位、年令、性別などはおおいがたい不可避の刺激価を提供するものと考え

られる。これらのいくつかの検査者の特徴が、被験者に対していかなる影響を与え、それがさらに被験者の検査成績にどのような差異となってあらわれるかという一つの問題に逢着する。このように考えてくると、テスト臨床においては、検査室の問題にさきんじて検査者の問題が解決されなければならないと思われる。

検査成績におよぼす検査者の影響に関する研究は、従来、種々の検査について、また角度を異にした検査者の把握の仕方によっておこなわれてきた。つぎにこれらの研究を概観することによって、問題の所在をより明確にしてみたい。

Cole⁽²⁾は、テスト臨床における検査者と被験者との間の Communication と rapport の問題を強調したが、この中でも特によい rapport が両者の間に作られなければならないとし、投射検査の場合には一層重要であるとした。さらにかれば、検査結果の妥当性は rapport の良否によって決定されると判断した。続ら⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾は、知能検査成績におよぼす実験者—被験者関係の影響を問題としてとりあげ、両者間の rapport、実験者の印象、実験者との親近性などの観点からこれらがそれぞれ好ましいと判定された実験者によって実施された被験者の検査成績に上昇傾向のあることをみいだした。この事実が、客観テストとしてもっとも高い信頼度をもっといわれる知能検査についての結果であってみれば、いかに検査者が検査事態において、刺激としての大きな意味をもつかを如実に示したものとわなければならない。佐藤⁽¹¹⁾は Hartshorne らの正直性検査にもとづいて、担任教師と外来者とによる虚偽の生起をみたが、生徒に対して権威的存在であると思われる担任教

師の検査実施の場合に、抑止的作用としての虚偽の減少をみとめ、また、検査者の影響は、検査者に対する被験者の好悪や、個人的条件によるよりは検査者の地位、その他は被験者との人間関係であるとした。Diamond⁽³⁾は、自動運動実験における反応の修正を正常人と分裂病患者との比較においてとらえたが、患者群では強い固執傾向がみられ、影響の少ないことをあきらかにした。また、Sacks⁽¹⁰⁾も実験者との rapport の問題をとりあげた。Wicks⁽¹⁶⁾は、わずかの実験者の動作や口ぶりが検査結果に影響したことを報告した。Thibaut ら⁽¹²⁾は、被験者に対する実験者の相対的地位が問題であるとした。TATについてみると、Bernstein⁽¹⁾は、検査者をテスト臨床における抑止的要因 (inhibiting factor) とみ、被験者の応答様式を口頭と筆記、また検査者が被験者と同席するか否かの組合せで、検査を実施したところ、口頭、筆記には差がみられなかったのに対して、検査者が同席するか否かの間には差をみいだした。そうして、検査者がいあわせない方が検査結果によい効果をもたらすとした。Gibby ら⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾はロールシャッハ・テストについて検査者の影響をみようとした。ロールシャッハの質疑 (inquiry) を、異なる検査者から実施された場合、反応決定因について F, CF, FY, YF, V に有意な差をみいだした⁽⁵⁾。また、異なる検査者によって実施された反応決定については、F, M, FC, CF, C, FY, YF, V (Beck 方式による) の中で F, C, FY (パーセントでは F, C, YF) に変動の生ずることをみとめた⁽⁶⁾。

検査者が被験者の検査成績に何らかのかたちで影響することが、従来の研究成果の中にみられたが、検査材料、検査者、被験者についてそれぞれまちまちであって、いまここでただちに一贯した、普遍的な検査者の影響をとらえようとするのは、いささか早計に感じられる。

本研究では、さきにのべた Gibby ら⁽⁶⁾のロールシャッハ・テストに関する先駆的な研究から生ずる反省を基盤として、これをさらに発展させ、この検査に対する検査者の影響を広範にかつ多角的に検討するために計画されたもの

である。この第1報告では、Gibby らにみられなかったものとして、①検査者の設定をある特性に基づいて明確にし、②正常者(児童)を対象として、③再テスト法を用い、④さらに統制群法により変動因(検査者の差異による影響)をとらえやすくし、また、⑤反応の分析領域を基礎的な全領域にまで拡大してとりあげることにした。

検査成績に対する検査者の影響は、検査者の型にもよるが、また被験者の型にも関係するであろうし、したがってそこには当然検査者-被験者関係の組合せにもとづく型も問題となってくるであろう。さらにまた、ロールシャッハ反応自体の分析を広げ、深めていくことも残された問題である。将来、これらの諸問題が明らかにされることによって、テスト臨床において、真に個人理解に到達するための新しい具体的操作、ひいては新しいパーソナリティ論が意図されてもよいと考えられる。

Ⅱ 研究 方 法

検査者: Gibby ら⁽⁶⁾は、12人(男9、女3)の検査者の選定にあたって、①経験年数2年以上、②取扱いケース20例以上、③2人の研究者によって異なった性格をもっていると認められた、という三点からなされた。この選定条件によると、各検査者はかなりロールシャッハ・テストに習熟しているとみられるので、得られた検査結果には信頼があると思われるが、12人の検査者の特性、検査者間の差異については明らかでなかったといえる。そこでわれわれは、検査者の選定にあたってつぎの方法により、好感度の高い検査者2人(AとA')と低い検査者2人(BとB')の計4人を選定した。

(1)心理学専攻の男子学生の中から、「明朗快活、積極的、外向的」で人から好かれ易い型(好感型)のものと、逆に、「陰うつ、消極的、内向的」であまり人から好かれにくい型(非好感型)のものを、各型について2人ずつ抽出した。教官および学生の任意な評定によってもっとも一致度の高い学生が選ばれた。この抽出方式には多くの問題が含まれていると思われるが、

この際は、具体的な接触場面で特に影響しやすい表出行動あるいは印象をとりあげた方が適切であると判断したからである。

(2)つぎに、抽出された4人の検査者(A、A'、B、B')に対して、ロールシャッハ・テストの被験者16人を含む、1クラス42人の児童の好悪の評定を求め、検査者に対する児童の好感度をとらえた。これは、検査の被験者が検査者に実際にいく印象が、われわれの評定といかに一致するかをみるためのものであり、かりにもし、両者の評定に一致がみられないとすると、検査者の選定について別の方法が必要になってくるからである。児童による好感度の調査は、①まず、児童に評定の判断に手がかりを与える意味で、教室での児童の自習時間(夏休みの課題の整理)を利用した。各検査者は、各児童と均等な接触回数をもつように机間巡視をして、各児童と個別に接触した。②その際、AとA'(好感型検査者)は児童と積極的に交渉して好感をもたれるように接触し、これに対してBとB'(非好感型検査者)は接触の機会もつが、殆んど没交渉で児童に好意ある関心を示さないように振舞った。③約1時間たった後で、「この時間、みなさんと一しょにいた学生さんで好きな人はだれですか。好きな順に1、2、3、4と番号をうってください。」という教示を与えて、児童の各検査者に対する好感度を調査した。Table 1 にみられるように、検査者AとA'には好感度の差がみられず、検査者AとBには差がみられAが高いことがわかった。検査者BとB'とに有意の差が出たのは、B'の好感度が極度に低かった事情によるため、A、A'(好感型検査者)において好感度が高

Table 1 検査者の好感度の差

		N=42		
		χ^2	df	P
A	A'	7.482	3	>.10
A	B	8.992	3	<.02
A	B'	30.984	3	<.01
A'	B	12.687	3	<.01
A'	B'	40.302	3	<.01
B	B'	29.282	3	<.01

く、B、B'(非好感型検査者)において低いことが確かめられた。

被験者: Gibbyらは、等質と思われる軽度の神経症および精神病患者(25才~32才の白人)12人を用いたが、われわれは手はじめとして、小学校六年の正常児16人(男8、女8)を対象とした。これは今後の課題として、検査者の影響の発達のな問題の一部をなすものでもある。これらの被験者は、①知能、②学業成績、③性格の三点について、特異なものを除いた普通児によって構成された。この選定基準も今後、それぞれの観点について特異なものを対象とする際の一部をなすものである。

被験者の構成は Table 2 に示めすとおりである。表の中で学業成績は5段階評定による8教科の合計である。また、性格特徴は担任教師によってなされた、日常の行動観察にもとづいてなされたものである。

Table 2 被験者の構成

被 験 者		知能指数	学業成績	性 格 特 徴
実 験	A. S ♂	113	27	a (温順)
	N. Y ♀	110	32	b (外向的)
	K. T ♀	118	29	c (解放的)
	Y. K ♀	113	26	d (消極的)
群 N=8	K. S ♀	106	31	a
	Y. T ♀	110	33	b
	M. N ♀	104	30	c
	I. E ♀	107	28	d
統 制	O. T ♂	111	27	a
	T. T ♀	113	30	b
	T. K ♀	119	25	c
	M. K ♀	115	25	d
群 N=8	M. S ♀	110	31	a
	H. M ♀	121	30	b
	N. Y ♀	102	29	c
	Y. T ♀	109	27	d
平 均		110.6	28.7	

テスト実施の手続: まず、検査者はロールシャッハ・テストの実施法に習熟したのち、Table 3 に示めす実施計画にもとづいて、各被験者に対して個別に検査を実施した。検査の教示と質疑は厳重に所定の方式(9)にしたがって行なわれたが、検査者の話しぶり、応待の態度、一般的態度などは、さきのにべた好感型、非好感型の特徴を生かすように振舞った。

Table 3 テストの実施計画

被験者		検査者		A	B	A'	B'
実 験	A. S	♂		①—②			
	N. Y	//		②—①			
	K. T	//		①—②			
	Y. K	//		②—①			
群 N=8	K. S	♀		①—②			
	Y. T	//		②—①			
	M. N	//		①—②			
	I. E	//		②—①			
統 制	O. T	♂		①—②			
	T. T	//			①—②		
	T. K	//		②—①			
	M. K	//			②—①		
群 N=8	M. S	♀		①—②			
	H. M	//			①—②		
	N. Y	//		②—①			
	Y. T	//			②—①		

凡例……実験群 A. S ♂ の①—②は、第1回目の検査を検査者Aから、第2回目をBからうけることを示す。第1回目の検査と第2回目の検査の間隔は5日～8日であった。

Gibbyらの手続では、12人の検査者が12人の被験者に対して、1検査者が1被験者をうけて1回の検査を実施したが、われわれのように検査者の特性(好感度)を明示した場合、しかも再テストを実施する場合は、検査者の単なる移動による影響や、検査の実施順序による影響が混入することができるのを防ぐ意味でこのような実施計画を立てたのである。

結果の処理: 各被験者から前後二回にわたって得られたロールシャッハ反応は、Klopfersの方式に準じて(9)記号化され、ついで数量化された。そうして、各記号に属する反応実数が、A—B(異型間)、A—A'(好感同型間)、B—B'(非好感同型間)のそれぞれについて検討されたが、同型間に差がみられず、異型間のみ差を生ずる結果が得られれば、これは検査結果に検査者の型が影響したことを意味する。この報告では、手はじめとして、ロールシャッハ反応の全記号について、基礎的評定(basic scoring)に限ったが、用いられた記号はつぎのとおりである。

①総反応数(R)、反応時間(T)、初発反応時間(T/R1)、②反応領域(W. D. Dd. S.)、③反応決定因(M. FM. m. k. K. FK. F.

Fc. c. c'. FC. CF. C. spC)、④反応内容(H. A. Aobj. Obj. Pl. At. Sex. Anal. Blood. Fire. Cloud. Smoke. Lands. Abst. Map. Na. Expl. Arch)、⑤平凡反応(P)と新規反応(O)。

今後の検討として、いろいろな仮説に立脚したより広範なあるいは要約的な分析がなされなければならないと考えている。

III 結果と考察

1. 反応数、反応時間について 反応数(R)についてみると、全被験者を通じてかなり多い反応数をみせているが、特に好感型(A、A')による場合に顕著である。Table 4にみられるごとく、実験群において、好感型検査者による場合に増大がみとめられた。反応数の増大は同時に反応時間の増大になってあらわれた。このことは、逆にいえば、反応時間の増大は、徒費された時間あるいは遅待を意味する時間ではなく、生産的な、反応数を増大するために費やされた時間であったということになる。一般に、反応数が、防衛的、抑制的、敵意などの指標に用いられるとすれば、反応数の増大はそれらの点が減じ、いわばより大らかな、寛大な被験者の態度を生じたものと推定される。初発反応では無色彩カードについてのそれが若干(10%水準以下)の増大傾向をみせた。

2. 反応領域について 好感型検査者の場合にみられた反応数の増大は、いかなる反応(記号)についてあらわれるのか、この追求がこれからの一つの視点になると考えられる。以下の各記号に属する実数は、Klopfersの方式に準じて、主分類(main score)とともに副分類(additional score)が採用され、主分類には1、副分類には0.5を与えて計算された。結果についてみると、W(全体反応)、D(普通部分反応)に好感型検査者の場合増大傾向(10%水準以下)がみとめられたが、これは、他のDd(異常部分反応)、S(間隙反応)の変化に伴う増大ではなく、総反応数の増大による自然な増大とみられる。

3. 反応決定因について とりあげられた各決定因について検討した結果は Table 6に示め

Table 4 反応数, 反応時間 (秒) の平均

	A	B	t	A	A'	t	B	B'	t
R	34.3	26.1	2.889※	34.5	32.7	2.770	24.5	21.3	1.315
T	1260.1	463.1	5.833※※	1463.7	1427.5	0.127	338.5	461.0	0.571
T/R1	18.8	15.4	0.919	22.4	28.3	0.800	14.6	22.7	0.712
T/R1 (non-color)	19.8	14.3	2.004	20.5	28.9	0.649	12.1	20.2	1.702
T/R1 (color)	19.1	16.6	0.909	24.3	25.1	0.547	17.1	25.4	0.722
	df=7			df=3			df=3		

Table 5 反 応 領 域

	A	B	t	A	A'	t	B	B'	t
W	16.0	14.3	2.120	21.2	23.2	0.942	17.8	13.8	0.667
D	17.0	10.8	2.310	11.3	8.2	1.283	6.2	7.0	0.388
Dd	1.0	1.1	0.357	1.0	0.5	0.500	1.0	0.5	0.577
S	2.0	1.3	1.590	2.5	1.8	2.615	0.8	1.1	0.379
	df=7			df=3			df=3		

すとおりであるが、F (形態反応) についてのみ好感型検査者の場合増大傾向がみられたに過ぎなかった。Gibbyらの得た他の記号 (C, FY, YF) については一致をみせなかったが、これは一部に用いられた被験者の差異にもとづく性

質のものであるとも考えられる。増大傾向をみせたFについてその形態水準をみると、良形態 (+, ±) が増え、不良形態 (干, -) が減じているところから、Fの増大は質量ともに増大したものといつてよかろう。

Table 6 反 応 決 定 因

	A	B	t	A	A'	t	B	B'	t
M	2.5	2.7	0.467	8.0	12.0	2.728	3.7	3.6	0.344
FM	6.0	5.8	0.550	6.0	6.1	0.151	4.0	4.5	0.578
m	2.3	2.0	0.768	0.6	1.3	1.550	1.0	1.3	0.792
k	0	0.1	1.000	0	0	—	0.7	0	1.736
K	0	0	—	0	0.2	1.00	0.5	0.1	1.562
FK	1.0	1.8	1.880	1.0	1.7	1.260	0.7	1.2	0.680
F	18.2	11.1	2.940※	16.7	11.8	2.808	12.0	9.0	1.675
Fc	1.6	1.5	0.161	1.2	1.0	1.004	2.5	1.5	1.225
c	10.5	9.5	0.388	0	0	—	0.1	0.5	2.798
c'	0.6	0.1	1.597	0	0.1	0.502	0.3	0.1	1.736
FC	0.5	0.6	0.310	1.0	1.6	0.768	0.1	0	1.008
CF	2.0	1.9	0.159	1.2	1.8	0.397	5.5	10.0	1.722
C	0.2	0	1.004	0.1	0	1.008	0	0.1	1.008
	df=7			df=3			df=3		

4. 反応内容、平凡反応について A (動物反応) について好感型検査者の場合に増大がみ

とめられ、またP1 (植物反応) に増大傾向 (10%水準以下) がみとめられた。

Table 7 反 応 内 容 と 平 凡 反 応

	A	B	t	A	A'	t	B	B'	t
H	6.8	5.6	1.528	11.1	10.2	0.658	7.0	5.5	1.567
A	18.0	13.0	2.406*	1.7	1.5	2.886	11.3	9.5	0.784
Aobj	0.6	0.6	—	0.5	1.0	1.736	0.3	0.6	1.569
P1	18.5	14	1.937	1.1	1.6	1.736	1.8	2.6	1.002
Obj	2.3	1.8	1.842	2.0	2.5	1.096	0.5	0.3	0.242
At	0.7	0.7	—	0.6	0	2.615	0.8	0.8	—
Fire	0.8	0.4	0.837	1.0	0.8	0.190	0.5	0.7	0.656
Lands	1.4	1.8	1.672	0.6	2.3	2.051	0.7	0.7	—
Na	1.4	0.9	1.306	1.1	1.6	1.416	1.6	0.8	1.001
Expl	0.7	0.8	0.553	0	0	—	0.5	0.7	0.523
Content Range	7.1	6.8	0.423	7.2	7.0	0.523	7.5	8.0	0.378
P	5.7	6.0	0.551	6.7	5.5	0.614	22.0	17.0	2.615
O	4.2	4.3	0.118	5.5	4.5	0.632	5.0	4.0	0.816
		df=7			df=3			df=3	

IV 要 約

われわれは、検査者の被験者に対する影響を明らかにするために、Gibby らの研究を出発点とし、その反省に立ってこの研究に着手した。この報告では、検査者の好感度と被験者のロールシャッハ反応の関係を問題とした。この場合、正常児童を対象とし、再テストによる統制群法を用い、ロールシャッハ反応を基礎的評定の段階で検討した。その結果、好感型検査者によって検査が実施された場合に、R (総反応数)、T (反応時間)、T/R1 (無彩色初発反応時間)、W (全体反応)、D (普通部分反応)、F (形態反応)、A (動物反応) P1 (植物反応) に増大傾向のあることをみとめた。総反応数の増大は、かなり多い反応数をもつ記号 (いまあげたW、D、F、A、P1) に対してのみ波及したところを見ると、これは自然の増大とみられるであろう。

この段階の分析で多くを語ることは許されないであろうが、言えるとすれば、反応数の増大は自然増の形であらわれ、特に他の記号との直接的な干渉関係を伴わないということである

う。また、言葉をかえしていえば正常児を対象とした場合は、検査者の影響は Gibby らにみられたように顕著ではなかったといえるかも知れない。しかし、たびたびのべたように、この段階での分析からさらに残された分析を施すことによってはじめに必要な解釈が施されるものと考えられる。

付記 本研究にあたって、絶えず指導と助言あるいは協力をしてくださった広島大学心理学研究室、三好、小林、小川、吉岡の各先生、島根大学付小、久保田先生、日赤松江病院精神神経科、菅原先生、島根大学学生、井上、嘉儀、奥原、井上君のみなさんに厚く感謝の意を捧げます。

引 用 文 献

- (1) Bernstein, L. : The examiner as an inhibiting factor in clinical testing. J. Consult. Psychol., 1956, 20, 287—290.
- (2) Cole, D. : Communication and rapport in clinical testing. J. Consult. Psychol., 1953, 17, 135—138.
- (3) Diamond, M. D. : The ability of Schizophrenics to modify response in an interper-

- sonal situation. *J. Consult. Psychol.*, 1956, **20**, 441—444.
- (4) Gibby, R. G., Stotsky, B. A., Harrington, R. L. & Thomas, R. W. : Rorschach determinant shift among Hallucinatory and Delusional patients. *J. Consult. Psychol.*, 1959, **19**, 44—46.
- (5) Gibby, R. E. : Examiner influence on the Rorschach inquiry. *J. Consult. Psychol.*, 1952, **16**, 445—449.
- (6) Gibby, R. G., Miller, D. R. & Walker, F. L. : The examiner's influence on the Rorschach protocol. *J. Consult. Psychol.*, 1953, **17**, 425—428.
- (7) Goss, A. E. & Brownell, M. H. : Stimulus-response concepts and principles applied to projective test behavior. *J. Pers.*, 1957, **25**, 505—523.
- (8) Goss, A. E. & Brownell, M. H. : Stimulus-response analysis of inference from projective test behavior. *J. Pers.*, 1957, **25**, 525—538.
- (9) 片口安史 : ロールシャッハ・テスト診断法詳説 1960, 牧書店.
- (10) Sacks, E. L. : Intelligence score as a function of experimentally established social relationship between child and examiner. *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 1952, **47**, 354—358.
- (11) 佐藤健 : 検査者の被験者におよぼす影響について——検査をくりかえした場合の変化——、教育心理学研究 1959, **7**, 29—39.
- (12) Thibaut, J. W. & Riecken, H. W. : Authoritarianism, status and the communication of aggression. *Human Relation*, 1955, **8**, 95—120.
- (13) 続有恒、秦安雄、久世敏雄、：実験者—被験者間の Rapport についての—研究 — 精神薄弱児の知能測定を通して——、心理学研究1956, **27**, 22—28.
- (14) 続有恒、秦安雄、久世敏雄、江見佳俊 : 作業成績に及ぼす実験者—被験者関係の影響 (I) —— 実験者の影響と知能検査成績 ——、心理学研究1958, **29**, 95—99.
- (15) 続有恒、久世敏雄、秦安雄 : 作業成績に及ぼす実験者—被験者関係の影響 (II) 実験者との親近性と知能検査成績 ——、心理学研究 1958, **29**, 100—104.
- (16) Wickes, Jr. T. A. : Examiner influence in a testing situation. *J. Consult. Psychol.*, 1956, **20**, 23—26.

(昭和36年10月28日受理)